

うたとかたりの対人援助学

第12回 ダイバーシティ&エコロジーと説話伝承

鵜野 祐介

共同研究の起ち上げ

本欄「うたとかたりの対人援助学」第7～10回の「かたりの文化としての手話 その1～4」でも紹介してきたように、筆者は2018年2月より関西圏を中心に「手話による民話語りの活動」の取材を行ってきた。その一方で、日本口承文芸学会『口承文芸研究』第40号(2017年3月)に、「海外の研究動向」として英国スコットランドの民俗学者エラ・リース氏の「手話による語りの活動」に関する研究を紹介し、2019年6月には日本口承文芸学会第43回大会(沖縄国際大学)において「ろう学校における手話を用いた民話絵本の読み語り活動 ―説話伝承とダイバーシティ―」の口頭発表を行った。さらに同年7月には日本昔話学会2019年度大会(大阪市立大学)においてシンポジウム「昔話とダイバーシティ」の司会進行を務め、「アイヌ」「在日コリアン」「ろう者」の事例報告を元に議論を交わした。

以上のような経緯の下に、このたび「多文化共生社会の実現に向けて説話伝承が果たし得る役割に関する実証的研究」と題する共同研究を、3名の研究分担者とともに起ち上げることになった。

現段階では特定の財団からの研究助成が確約されているわけではなく、不確定要素も多いため、研究分担者の氏名公表は差し控えるが、構想中の本プロジェクトの概要をここにご紹介し、皆様のアドバイスを仰ぎたい。

研究の概要

本研究は、「文化的ダイバーシティ」と「文化的エコロジー」を尊重する「多文化共生社会」の実現に向けて説話伝承が果たす機能や役割について、「ろう者」「アイヌ」「在日コリアン」「在阪ウチナンチュ(大阪在住の沖縄出身者)」という4つのマイノリティ(社会的少数者・弱者)における取り組みを調査し、その現状と将来的な可能性を探っていこうとするものである。

個々のマイノリティが抱えている伝承活動の困難さを、マジョリティ(社会的多数者・強者)との間に存在する共通のポリティクス(政治力学)としての「文化的コンフリクト(摩擦・軋轢)」と捉えた上で、それぞれの「語りの文化」や説話伝承が保持している固有性や独自性を発見し、そこに「文化的ダイバーシティ」を確認すること、さらにはマジョリティにおける「語りの文化」との共通性や連続性を発見し、そこに「文化的エコロジー」を確認すること、これらを通して「多文化共生社会」の実現に向けて説話伝承が果たす役割を具体的に指し示すことが本研究の目標である。

「文化的ダイバーシティ」とは

今日の世界および日本における喫緊の社会的課題として、「文化的コンフリクト」とその基底にある「非寛容性」や「サイド(側)の発想」を克服し、「文化的ダイバーシティ」と「文化的エコ

ロジー」の尊重に基づく「多文化共生社会」を実現することが挙げられる。

教育社会学者の藤田由美子は、「ダイバーシティ」の視点とは「人間社会における性別・人種・民族・宗教などの多様性を受容し、互いに認め合おうとする考え方である」と規定する(藤田・谷田川『ダイバーシティ時代の教育の原理 多様性と新たなつながりの地平へ』学文社 2018:i)。その上で藤田等は教育的諸課題として、①貧困家庭の子ども、②社会的養護によって育つ子ども、③外国につながる子ども、④性的マイノリティの子ども、以上4つの立場の子どもたちを挙げ、「ジェンダー」と「ダイバーシティ」の視点からこれらの課題について論究する。

ここで注目されるのは、4つの立場の子どもたちはいずれも「マイノリティ(社会的少数者・弱者)」と見なせる存在であり、おそらくはそれ故に、教職科目としての「教育学」や「教育原理」のテキストにおいて従来多くの紙面を割いてこなかった領域であるという点だろう。「文化的ダイバーシティ」とは何かを考える上で、「マイノリティ」と見なされてきた(あるいは現在も見なされている)人びとが創造し継承してきた文化に焦点を当て、その独自の価値や意義を認め尊重しようとする姿勢が求められる。

「文化的エコロジー」とは

一方「文化的エコロジー」とは、現代思想家モートンが「エコロジーは私たちがいかにして一緒に生きていくかを想像するその方法の全てを含む」と規定した上で「相互連関」と「共存」の概念をめぐる議論を進めていることから窺えるように(篠原雅武『複数性のエコロジー 人間ならざるものの環境哲学』以文社 2016:139)、ある文化は異なる文化との「相互連関」の中で「共存」しているとする発想を指すものである。

「文化的ダイバーシティ」の発想が内包する

「他者性」が、「異文化」を保持する社会や個人に対する不信感や差別・排除へと向かっていかないための補完装置として「エコロジー」の発想は機能する。つまり、異なる個性を持った多様な文化が、孤立し排斥し合う形ではなく、相互に連携し共存しているが故に尊重し合おうとすることが、「文化的ダイバーシティ」を補完する「文化的エコロジー」の発想と言えるだろう。そしてこの両者が尊重される社会こそ「多文化共生社会」と見なし得る。

着想に至った経緯

筆者は大学生だった 1980 年代半ばより、歌や物語が子どもの人格形成に及ぼす影響に関心を持ち、大学院の頃から全国各地で口承文芸(民間説話・歌謡・言葉遊びなど)の調査を始め、以来、口承文芸の伝承が聞き手としての子どもにとって持つ意味について考究してきた。

1991 年より英国スコットランドのエディンバラ大学大学院に留学し、歌うことや語ることの人間学的な意味や社会的な機能について学ぶ機会を持った。30 年以上に亘るこうした口承文芸の社会的文脈や機能論的意味への関心が本研究の着想に繋がっている。

2011年3月11日の東日本大震災の後、「みやぎ民話の会」の復興支援活動や立命館大学応用人間科学研究科の「東日本・家族応援プログラム」等に参加する中で、民間説話の伝承が当事者の地域的アイデンティティを強化するとともに、逆境を乗り越えて生きていこうとする「レジリエンス」を引き出していることを看取した。

同時に、語りの場を共有することにより、当事者に寄り添い彼らと共に生きていこうとする非当事者の姿をも目の当たりにすることとなった。つまり説話伝承が地域文化の固有性や多様性を顕在化させる一方で、異なる社会や文化に帰属する者同士を繋ぐ力をも有していること

に気づかされた。

2016年6月下旬、英国エディンバラでスコティッシュ・ストーリーテリング・センターのドナルド・スミス所長に取材した際、同センターの直面する課題として「文化的ダイバーシティ」と「文化的エコロジー」の尊重が掲げられた。またその一週間後にアバディーン大学での民俗学会において前述のエラ・リース氏の発表を聞いて、本研究プロジェクトを構想するに至った。

本研究が目指していること

日本社会における4つのマイノリティ(ろう者、アイヌ、在日コリアン、在阪ウチナンチュ)における説話伝承を、3つのステップを踏んで調査研究する。

ステップ1の目標は「歴史と現状の把握」であり、そこに「文化的コンフリクト」というポリテイクス(政治力学)の存在を確認する。ステップ2の目標は「固有性・差異性の発見」であり、そこに「文化的ダイバーシティ」を確認する。ステップ3の目標はマジョリティや他のマイノリティとの「連続性・共通性の発見」であり、そこに「文化的エコロジー」を確認する。

以上を通して「多文化共生社会」における説話伝承の機能と役割を明らかにしようとする。
(* 次頁の図を参照のこと。)

役割分担

筆者(鶴野)は、上述4つのマイノリティのうち、主にろう者の手話による語り文化の事例研究を行う。日本における文献考証やフィールドワークだけでなく、米国、英国スコットランドおよびフィンランドにおいてもフィールドワークを行い、日本との比較検討を行う。

また、アイヌや在日コリアンや在阪ウチナンチュの事例研究についても研究分担者や研究協力者と適宜、意見交換を行い、議論を積み重

ねながら「文化的ダイバーシティ」と「文化的エコロジー」を尊重する多文化共生社会の実現に向けて説話伝承が果たし得る役割について包括的な観点から考究する。

研究分担者A氏は、主にアイヌの説話伝承の事例研究を行う。アイヌ文化の保護・継承や創生・再創造に関する活動の歴史を、聞き取り調査や文献考証を通じて解明すると同時に、今日の北海道および首都圏のアイヌ語教室や、アイヌ口承文芸の講習会や関連イベントの調査を行い、そうした活動がアイヌおよびアイヌ以外の人のびとの「文化的ダイバーシティ」や「文化的エコロジー」の発想、意識に与える影響を考究する。また、関西や首都圏での「語りの会」の現状調査を通じて、このような場でのアイヌ文芸の現状と、アイヌ文芸を語ることによる「文化的ダイバーシティ」への意義を考察する。

研究分担者B氏は、主に在日コリアンの説話伝承の事例研究を行う。大阪・生野地区周辺に居住する在日コリアンの、芸能文化の保護・継承や創生・再創造に関する活動の歴史を、聞き取り調査や文献考証を通じて解明すると同時に、今日行われている説話伝承の様々な活動のフィールドワークを行い、そうした活動が在日コリアンおよびそれ以外の人のびとの意識における「文化的ダイバーシティ」や「文化的エコロジー」の発想にどのような影響を与えているのかについて考究する。さらに、大阪における説話伝承の様態や語りの様式、物語テキストの内容などの特徴を明らかにするために、大阪在住コリアンの多くが出自とする韓国・済州島や釜山などにおいて、これらに関するフィールドワークを行い比較検討する。

研究分担者C氏は、主に在阪ウチナンチュ(沖縄出身者)の説話伝承の事例研究を行う。大阪・大正区に居住する在阪ウチナンチュの芸能文化の保護・継承・発展の歴史を聞き取り調

査や文献考証を通じて解明すると同時に、今日行われている説話伝承の様々な活動のフィールドワークを行いながら、沖縄におけるそれと比較する。沖縄の文化は「文化的ダイバーシティ」や「文化的エコロジー」の発想を含むものであるが、それが移住先の異なる文化とどのような相互作用を持ってきたかについて考究する。

学術的独自性と創造性

本研究は、貧困層・底辺社会の人びと、被差別部落の人びと、少数民族、(移民・難民を含む)外国につながる人びと、故郷を離れて暮らす同郷の人びと、障がい者、性的マイノリティ、といった「マイノリティ(社会的少数者・弱者)」が保持してきた「語りの文化」としての説話伝承について、「文化的ダイバーシティ」と「文化的エコロジー」という視点から包括的に捉え、各々の個性や独自性と共、他のマイノリティやマジョリティの説話伝承との共通性や連続性を発見しようとする試みである。

特に、ろう者、アイヌ、在日コリアン、在阪ウチナンチュの四者に絞って実証的に研究を進める。従来、被差別部落、アイヌ、在日コリアンなど、マイノリティの説話伝承に関する個別の研究は行われてきたが、これらを包括的に捉えて他のマイノリティやマジョリティとの共通性や普遍性を見出し、多文化共生社会の実現に向けて「語りの文化」や説話伝承が果たし得る今日的役割を提示しようとする研究は、管見の限り皆無に等しい。

また、ろう者の手話については、20世紀後半以降、言語学・言語教育学・特別支援教育学・福祉学等からの研究は行われてきたが、手話を「語りの文化」という説話伝承の枠組みで捉え、その文芸的特徴や独自性、および「音声言語」との共通性と差異性を明らかにし、これを通して「人はなぜ語るのか」を考究する説話学的・

人類学的な研究は、やはり未開拓の領野と思われる。こうした意味において、本研究は学術的な独自性と創造性を有する画期的な試みとして非常に意義深いものと言える。

幼な子のごとく伸びやかに

今年11月10日、大阪府吹田市の「ゆいぴあ」で開催された「人の輪と心を育む『ひまわり教室』聴覚障がい児者支援室」主催の「10ミック・手話うた・てのひらえほん第4回」に参加した。

「きこえない人、きこえる人、おとな、こども、みんな一緒に楽しめる」「からだで歌おう」「おんがくを楽しもう」をモットーに掲げたこのイベントの中で、幼児から高齢者まで70名余りの参加者がてんでにタコになりイルカになって歌い踊った。60～70代とおぼしき方も、幼な子のごとく伸びやかに、にこやかな表情で身体を揺らす。老若男女を問わず、向かい合った相手と手をつなぎ、笑顔で握手して挨拶を交わす。ここには「ダイバーシティ」と「エコロジー」が見事に表現されている。

「10ミックを日本に紹介したのは、黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』に登場するトモエ学園園長・小林宗作。黒柳が手話の普及に尽力してきたこととも何か関係があるのかもしれない。

願わくば、本研究も幼な子のごとく伸びやかに進めていきたいものだ。

